

たはらはんそうしゃばんおてどめ おじとめ
「田原藩奏者番御手留」、**「同御自留」** について

平成 25 年 6 月

田原市博物館



田原藩奏者番御手留



田原藩奏者番御自留

1 奏者番とは？

江戸時代には、譜代大名は老中・若年寄等の江戸幕府の役職に就任し、幕府の政治を担当しました。奏者番はこうした役職の一つで、江戸城の殿中^{でんちゆう}において武家関係の典礼の執行を担当しました。20 人余りの譜代大名が同時に任命され、交代制で江戸城に登城してその役目を務めます。譜代大名たちは奏者番を振り出しに、寺社奉行・大坂城代・京都所司代などの重要な職務を担いました。

奏者番はその役職の性質上、藩主には江戸城内の将軍や諸大名のいる前で儀礼を滞りなく進めるための相応の知識と精神力が必要となります。このため、藩士が事前調査や他の奏者番への連絡、書記などの役割でサポートしました。

2 「田原藩奏者番御手留」の内容

「田原藩奏者番御手留」は 11 代藩主・三宅康直^{みやけやすなお} (1811~93) が天保 12 年 (1841 年) から嘉永 2 年 (1849 年) にかけて奏者番を務めた際に、主に田原藩士らによってまとめられた資料群です。桐のタンスの引き出しには、折本状にまとめられた覚書^{てどめ} (手留といいます) が整然と収納されていました。

大きなタンス (御手留) には、奏者番を務めた各大名家から集約された殿中儀礼が、小さなタンス (御自留) には実際に康直が奏者番を務めた際の記録が 1 案件 1 枚でまとめられています。こういった奏者番資料の収集や整理の手法は他の大名などでも行われており、群馬県の館林市立図書館秋元文庫 (館林藩秋元家資料) には同様の手留が同様のタンスに保管されています。

また、「御手留借込帳おてどめかりこみちょう（藩関係文書 160）」は田原藩が他藩から借用した手留の記録、「御手留御貸出帳おてどめおかしだちょう（藩関係文書 147）」は逆に田原藩が他藩に貸し出した手留の記録です。奏者番を務めた諸大名間で盛んに手留の貸し借りが行われていたことをうかがわせます。「帝鑑間詰同席大名勤務年数書出ていかんのまづめどうせきだいまいようきんむねんすうかきだし」は三宅家が江戸城内の居場所として割り当てられた「帝鑑間」で同席する大名がいつから家督を継いで大名になったかの手控え記録です。仕事上などの相談をする際に、相手の大名の経験値を知りたかったのでしょうか。

3 なぜ三宅康直は奏者番になりたかったのか？

さて、先に書いたとおりこの奏者番の職務は幕府内出世の登竜門ですが、殿中での職務、諸大名家との交際といった点を考えると多額の費用が必要です。一方で田原藩の財政は火の車。康直はかねがね奏者番に就任したいと考えていましたが、家老の渡辺華山（1793～1841）などによってたびたび諫められ、断念していました。しかし、蛸社の獄で華山が蟄居すると懲りることなく運動を始め、ようやく奏者番の役につきました。

従来、康直がそこまでして奏者番の役職に就きたがるのは、自らの見栄のためであり、藩内政をかえりみない身勝手なふるまいであるとして、後世の研究者にはしばしば批判的に書かれていました。一方で、つい先日「田原藩奏者番手留」を研究目的で閲覧したある研究者は、奏者番の引継ぎ時における師弟関係が譜代大名間の結束のツールになっているのではと考えているとのことでした。この観点から見れば、奏者番等の幕府の役職に就任することは、幕府内で立ち回ったり各種の情報を収集する際には有益であるといえそうです（実際に田原藩の古文書には幕府周辺の事件を他の大名から取材するなどして情報収集したようなメモがいくつも残っています）。今後の研究の進展に期待したいと思います。

なお、康直の後継者で最後の藩主となった三宅康保やすよし（1831～95）は大坂加番（大坂城の警護役）の他には特に幕府の役職は務めませんでした。

□ 参考資料

- ・ 田原町文化財調査会編『田原町史』中巻 田原町、田原町教育委員会、1975
- ・ 佐藤昌介著『渡辺華山』吉川弘文館、1986
- ・ 大友一雄著『江戸幕府と情報管理』臨川書店、2003